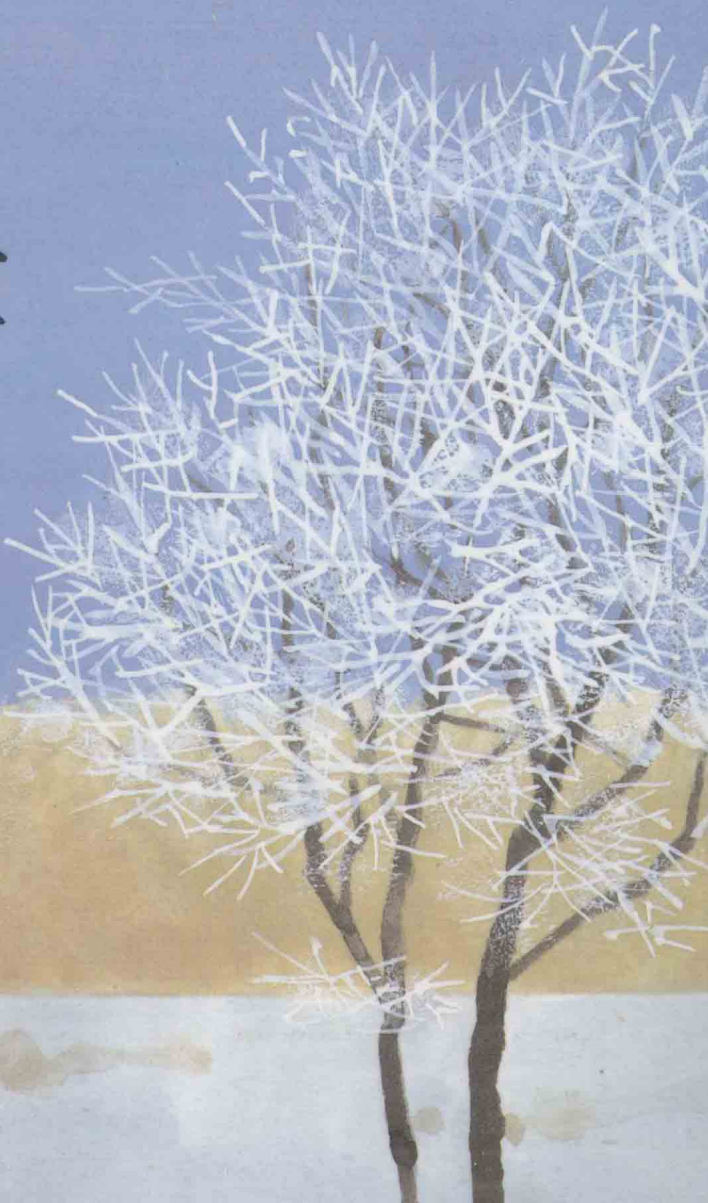


水なき雲

三浦綾子



三浦綾子
水なき雲



水なき雲みずくし

一九八三年五月二十五日初版発行
一九九六年二月一〇日二版発行

著者 三浦綾子みうらあやこ

発行者 嶋中行雄

印刷 三晃印刷

製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八七

電話

販売部 〇三(三五六三)一四三一

編集部 〇三(三五六三)三六六六

振替 〇〇一二〇四三四

©一九八三 検印廃止

Printed in Japan
ISBN4-12-001199-2

◇定価はカバーに表示してあります。
◇落丁本・乱丁本はお手数ですが、小
社販売部宛お送り下さい。送料小社
負担にてお取り替えいたします。

水なき雲

装
幀
掘
文
子

縁側の戸をあける音に、純一は目を覚ました。母の亜由子は、毎朝、起きると直ちに、布団を片づける前に縁側の戸をあけ放つ。大風や豪雨でもない限り、それを怠ったことはない。今朝はその戸のあけ方が、ひどく乱暴に、純一の耳に響いた。

庭で雀の囀る声がある。三羽ほどの雀のようだ。純一は隣りの布団に寝ている弟の真二を見た。真二は二つ年下で、五歳である。片頬を縫いぐるみの黄色い兎の枕に押しつけて眠っている。赤い兎の眼が、真二の頬の下でひしゃげていた。

かすかにあいた真二の唇から、小さい歯がのぞいている。軽く閉じた瞼の下で、目の玉がくるくる動いている。眠っていて目の玉が動く時は、夢を見ている時だと、父が言ったことがあった。(何の夢を見ているのだろうか?)

純一は弟の真二がかわいい。まだ五歳だが、真二は純一に負けずにピアノを弾くし、将棋もできさる。

今年の正月、純一が父に将棋を習った。それまでは、純一は挟み将棋しかできなかったが、駒の動かしか方を覚えると、時々父に相手をしてもらうようになった。そばで見っていた真二もいつの

まにか将棋を指せるようになった。今では、純一と真二は、勝ったり負けたり、好敵手だ。

母の亜由子は、教えられても駒の動かし方を覚えようとはしなかった。

「めんどうくさくて、そんなこと覚えられないわ。将棋なんて、男のするものよ」

と、頭から無関心だった。だが、父の和朗が純一に教えるのを見ていて、駒の動かし方を覚え、た真二に驚いて、亜由子は言ったものだ。

「真ちゃんはいい頭ね。真ちゃんならきつと東大に行けるようになるわ」

確かに真二はものおぼえがよかった。将棋の駒の字はもとより、純一の読む教科書も、すぐに読んだ。その上に、真二は誰にも好かれる性格だった。いや、誰をも嫌わぬ性格だった。

遠野木佐貴子は、母の亜由子の姉で、則雄はその夫であった。純一はこの伯父も伯母も嫌いだ。伯父はめったに笑顔を見せたことがない。亜由子に言わせると、遠野木の伯父は日本一の大学を出た頭のよい偉い人間だと言うが、純一には全く親しめなかった。

佐貴子は目の大きい、子供心にも美しいと思われる伯母だが、この伯母もなぜか純一には好きにはなれなかった。どこかが恐ろしかった。笑顔で話しかけられても、うつ向きたくなかった。この遠野木家は、同じ札幌市内の山鼻やまなはにあるので、純一たちは「山鼻のおじさん」「山鼻のおばさん」と呼んでいた。純一の好きになれないこの伯父伯母にも真二はなついていた。二人の姿を見ると、飛んで行って抱きついた。真二がにこっと、人なつっこい笑顔を見せると、この伯父でさえ片頬をゆるめて、

「坊主、相変らず元気だな」

と、その頭をぐりぐりとなでる。真二はまた、何をもらっても喜んだ。とりわけ愛らしいのは、

純一のおさがりをもらう時だった。新品を与えられる以上に喜んで、

「これおにいちちゃんのおふるだよ。かっこいいでしょ」

と、服でもズボンでも見せて歩く。母の亜由子が、

「そんなことは言わないのよ」

と、たしなめても、

「だって、ぼくおにいちちゃんの服をもらうのうれしんだもん」

と、無邪気だった。

純一は今、眠っている真二の瞼の下に動く目の玉を見ていて、不意にさわってみたくなった。そっと手を伸ばして、瞼の上から目の玉にふれようとした時、真二の濃い一文字の眉が動いて、ぼっかりと目があいた。

「あれ！ パパは？」

真二は首をめぐらせてあたりを見た。

「パパ？ パパなんかいないよ」

「なあんだ、ゆめか。ぼくね、おにいちちゃん、いまパパとうでずもうしていたの」

「ふーん、よかったね」

純一は羨ましいような気がした。この十日ほど、父の和朗は家に帰ってはいない。

「パパかえってきたかな」

真二が布団の上に起き上がった。グリーン格子のバジヤマのボタンが、二つ外れて小麦色の胸がのぞいている。

「帰っていないさ」

昨夜眠る時、父はまだ帰っていないかった。父の和朗は、月に五日か一週間家を留守にする。純一や真二は、その度に出張だと母から聞かされてきた。夜の遅いことも多い。

留守勝ちだが、純一も真二も父の和朗が好きだった。いつも家にいる母の亜由子よりも好きな気がする。亜由子は顔立ちは佐貴子とちがって、目の細い優しい感じだが、性格は似ていて、強かった。

だが和朗は、いつも笑顔を絶やさなかった。家にいる限りは、純一と真二の遊び相手になる。トランプ、五目並べ、将棋、腕角力、プラモデルなどなど、何でも二人の相手をする。

「よかったな真二、パパのゆめをみて、とくしたな」

「うん、とくしたよ、ほく」

バジャマのボタンを外しながら、真二がうなずいた。

純一はふっと、昨日の妙な出来事を思い浮かべた。

(あのひと、パパにほんとによく似ていたなあ)

昨日の日曜日、純一と真二は、亜由子につれられてMデパートに行った。食堂でお子さまランチを食べ、玩具売り場でプラモデルを買ってもらい、エスカレーターで三階の婦人物売り場に降りた。

亜由子は夏物のブラウスを一心に選んでいた。純一と真二は退屈になってあたりを見まわしていた。と、その時、十メートル程離れた向うに、純一は父に似た男が歩いているのを見かけたのだ。ベレー帽をかぶり、パイプを口にくわえたその男は、青いワイシャツに、グレイの背広を着

ていた。うす紫のブラウスを胸に当てて鏡をのぞきこんでいる亜由子の脇腹を突っついて、純一が、

「ママ！ パバがいるよ」

と、ベレー帽の男を指さした。亜由子はぎくりとして、純一の指さすほうを見たが、さっと顔をこわばらせて、

「パパじゃありません！」

と、切り返すように答えた。真二が、

「パパだ、パパだ」

と叫んで走り出そうとした。亜由子はその手をぐいと引いて、

「パパじゃないったら！ パバはあんなお帽子を持っていないでしょう。あんな青いワイシャツも着ませんよ」

と叱った。真二はその亜由子の顔を不思議そうに見上げ、

「でも、パパみたいだよ、おにいちゃん」

と、口を尖らせた。純一は亜由子のこわばった顔を見ると、うなずくことができずに、
「ちがう人だとさ。パパ出張だもんね」

と、人ごみの中に見失った男の姿を追った。

その時のことを純一は今思い出したのだ。

「だけど、おにいちゃん」

脱いだパジャマをくるくるとまるめながら、

「きつとパパ、かえっているとおもうよ。だってぼくの手、ぎつちりにぎって、うでずもうしたんだもん」

「馬鹿だな、真二、それはゆめじゃないか」

だが真二の言うように、夜中に父が帰って来たのかも知れないと純一は思った。

「パパのへやにいつてみようか、おにいちゃん」

「うん……帰ってないと思うけどな」

「かえっていたらどうする？」

「うん、将棋の駒をやってもいいよ」

「ほんと!? おにいちゃん」

「うん、ほんとだ」

うれしそうに飛び上がった真二を見ると、本当に将棋の駒をやってもいいような気がした。真二は部屋を飛び出して、廊下を駆けて行った。

*

縁側の戸をあけ放ったものの、亜由子は夜具を片づける気力もなく、寝巻のまま、布団の上に戻って、ぼんやりと坐りこんでいた。庭のライラックが花盛りだ。ライラックの向うにアララギの木が幾本か大きく枝を伸ばし、白樺やナナカマドの庭木が茂っていた。そしてそれら庭木の枝越しに古ぼけた板塀がのぞいて見える。昭和の初期に建てられたというこの家は、和朗の父千次郎から譲られたものだった。二十坪の家が八十坪の敷地に建てられている。木造一階建である。玄関入ってすぐ左手が子供部屋で、右に並んで台所、居間、夫婦部屋、更にその奥に六畳間が

あり、子供部屋の奥が浴室になっていた。廊下が、子供部屋を出た所から夫婦部屋の前まで、庭に面して走っていた。亜由子は家の古さをいつもこぼしていた。が、和朗は、札幌のどまん中では、八十坪の土地だけでも大した資産だと言うのだ。そして、すぐにもこの家屋敷を売って新築したがる亜由子に、

「おやじの生きている間は、この家に住んでやってくれよな」

と、なだめて来た。その舅千次郎は、今年八十歳で、菓子材料卸し問屋を手広く経営していた。小学校を出るとすぐに丁稚奉公に入り、商売一筋に生きて来た千次郎は、長男の芳夫を後継ぎにして、今では北海道で屈指の菓子材料卸し問屋に築き上げていた。和朗は、人手の欲しいその店には手伝わずに、大学を出ると、ニットー自動車産業に入社した。同族会社に入社することを嫌ったのだ。最初の一年は札幌の支社に勤め、次の三年は東京本社の営業部でもまれた。希望して札幌に帰り、亜由子と結婚したのが、二十七歳の三月だった。翌年五月に純一が生まれ、二年後の四月に真二が生まれた。真二が二歳の時、亜由子は三人目を妊ったが流産し、その後避妊手術を受けた。今年で、二人は結婚八年になる。

古くはあっても、結婚と同時に、札幌駅に近い場所に八十坪の地所を持ったことを、亜由子は感謝してもいい筈だった。が、亜由子は、結婚前この家を和朗に見せられた時、

「まあ！ ずいぶん古い家ね」

と、呆れたように言った。そして、

「山鼻の姉に恥ずかしいわ」

と呟いたものだった。

遠野木則雄の曾祖父は、明治九年山鼻兵村が開かれた際、二百四十人の屯田兵と共に、岩手県から渡道し、入植した。ここ山鼻が、言わば札幌発祥の地で、屯田兵の多くは、士族を誇る家柄であった。大正時代に至って、遠野木家は山鼻にかなりの土地を持つ家となった。亜由子の姉佐貴子の夫は、桜田和朗より僅か二歳上だが、札幌市の中央にあるFビルに設計事務所を持つ気鋭の設計士である。佐貴子たち姉夫婦も、親譲りの古い家に住んではいたが、和朗たちの家とは、比較にならぬ大きな家であった。御影石の門に、大谷石おおやいしの塀も重々しく、二百坪からの屋敷を構えていた。どっしりとしたマントルピースのついた洋風の客間や、料亭のような広々とした和室が幾つかあり、夫婦部屋にも見事な北山杉の床柱を持つ床の間があった。幅一間の廊下がTの字に設けられ、更に縁側が、築山や、池や、藤棚の配置された、見事な庭に面していた。屋敷の片隅に、二階建の白壁の土蔵があり、そこには掛軸や、数多くの漆器や、絵画、陶器、船簞笥たんす、金屏風などの宝が整然とおさめられていた。

住宅のどの部屋にも出窓があり、一見して昭和初期の家とわかるのだが、それがまた一種の異国情緒を湛え、平屋ながら今はやりのモルタル造りなどの及びもつかない風格があった。

「山鼻の姉に恥ずかしいわ」

と言った言葉が、和朗の心にどう響いたか、亜由子は気づかなかった。その時和朗が大声で笑い、

「結婚は、二人の結びつきのほうが大切ですよ」

と、自信ありげに言ったからだ。確かに遠野木の姉夫婦は、堂々たる邸宅には住んでいたが、よそ目にもあたたかい夫婦には見えなかった。が、結婚以来亜由子は、姉の住む家とくらべては、

自分の家に不満を持って来た。和朗は一流会社の社員で、エリートコースを歩いているとは言え、まだ三十五歳であった。庭師なら垂涎のフララギが幾本もある庭であっても、その手入れさえ充分にはできていない。亜由子は一日も早くこの家と土地を売って、近代的なモダンな家を郊外に建てたいと執拗に願っていた。

が、今、亜由子の心を占めているのは、家屋のことではない。昨日Mデパートで見た夫の姿であった。亜由子は昨夜、輾転として眠れぬ夜を過ごした。Mデパートのブラウス売り場で、

「パパがいる」

と、純一から知らされ、十メートル先に見た男は、まさしく夫の桜田和朗であった。ベレー帽をかぶり、パイプをくわえ、青いワイシャツの上にグレイの背広を着こんでいた和朗の姿が、亜由子の血を逆流させた。亜由子はいつも夫に語っていた。

「わたし、ベレー帽の男って、何となく好きになれないの。どこか芸術家ぶっているようで、鼻もちならないの。それにパイプなどくわえたら、なおのことよ。それから色もののワイシャツを着る男も嫌い。ワイシャツは白が最高よ。白より美しいワイシャツはないわ」

和朗はその言葉にうなずいて、

「うん、あれは気障だね。若者ならともかく、色もののワイシャツは嫌いだ。君のいうとおり、白が最高だ。タバコなら葉巻といきたいところだが、これはほくには贅沢だろうね。パイプのような、かさばるものは、ポケットに入れて歩くだけでも面倒だ」

確かそう言っていたのだ。その夫が、こともあろうに、亜由子が常日頃嫌いだと言っている服装で、いきなり目の前に現れたのだ。目だけはあの和朗独特の、人なつっこいままざしで、傍ら

の女に何かひとことふたこと言っていた。顔の倍もあるほどのボリュームのある髪を、金髪に染めたその女は、赤い唇を忙しげに動かしていた。

亜由子は、女の存在にも腹は立ったが驚きはしなかった。夫の浮気は今に始まったことではない。結婚の翌年、和朗は人妻と関係を持った。亜由子が気づいたのではない。あれは三月も近い雪の日の午後だった。電話のベルが鳴って、亜由子が何気なく受話器を取った。純一があと二ヵ月経ったら生まれるという頃であった。

電話の声は男だった。

「もしもし、桜田さんですね」

あたりを憚るような声だった。そうだと答えると、不意に男は激した声になって、

「奥さん、助けて欲しいんです」

と、言葉をつまらせた。その男の妻と、和朗の関係を亜由子はその日初めて知った。その時の大きな衝撃を亜由子は忘れることはできない。幸いその関係は間もなく終った。が、更にその翌年、他の女と恋をした。今度は同じ会社の女性だった。和朗より四つ年上の、独身のその女性に、和朗は三ヵ月程夢中になって、つきものが取れたように、不意に別れた。

「ね、亜由子、ぼくはなんて馬鹿なんだろうね。あんな女のどこがよかったんだろう。鼻はひどい団子鼻だし、歩き方だって下品なんだ」

和朗はけろりとしてそう言った。その後、和朗は、半年に一人の割で相手が変わった。すぐに誰かを好きになり、そして簡単にさめた。和朗は、いかなる人に対しても敵意を持ってない人間に思われた。誰にも愛想がよく、親切に見えた。それは男女を問わなかった。また老若を問わなかつ

た。和朗は誰にでも好意を示した。確かに誰に対しても親切であった。

真二にはその血が流れていると、亜由子は心ひそかに思っている。亜由子自身、そんな和朗に心惹かれて結婚したのだが、それが過りだったことに気づいた。亜由子は、和朗が自分にだけ親切にしてくれるのだと思っていた。亜由子にだけ好意を示してくれるのだと思っていた。

「あんな人どこにもいないわ。誰にでも好かれる人よ」

亜由子は友人の家で知り合った和朗のことを、親や姉たちにそう言って紹介した。その亜由子に姉の佐貴子は、

「いい人らしいけど、ちょっと頼りないじゃない？ あれでもエリートなの？」

と言ったが、卒業した大学の名を聞いて賛成してくれた。幾度浮気をくり返しても、和朗は、「君を嫌いということじゃないんだよ。誰よりも君が好きなんだ。あんまり好きで、恐ろしいくらいだ」

などと真顔で言った。確かに和朗が亜由子を冷たくあしらうことは一度もなかった。そして、女とつき合っている間、外泊するということはなかった。それが二年前あたりから、俄かに和朗の出張が増えた。初めは出張と信じていたが、ある夜会社からの連絡が入って、出張でないことがばれた。ばれると、和朗は平気で外泊するようになった。初めは一泊であったが、三泊となり、五泊となり、今では十日に及ぶことさえある。が、十日以上に及ぶことは先ずなかった。何の屈託もない顔で、和朗は家に帰って来る。子供たちに出張と言いついて聞かせる手前、亜由子も妙な顔で迎えることもできなかった。夫の外泊にうまく馴らされてしまったような口惜しさがあった。だが月の三分の二は、それでもわが家にいるという安心感がある。

だから昨夜、輾転として眠れなかったのは、和朗の外泊のせいではない。夫が亜由子が一番嫌いだと言ったベレー帽をかぶり、パイプをくわえ、色もののワイシャツを着ていたことにあった。人のいいだけの人間だと思っていた和朗に、裏があった。決して人に敵意を持ってないと思っていた和朗は、実は、妻の自分に対して、激しい敵意を持っていたことを、亜由子は初めて知った。恐らく和朗は、ベレー帽を嫌いだと言う妻の言葉を聞きながら、必ずベレー帽をかぶってやると思っていたにちがいない。白いワイシャツが最高だと言った亜由子をせせら笑いながら、色もののワイシャツを着てやると思ったにちがいない。それは亜由子に、いきなり出刃包丁を突きつけられたような、殺意にも似た悪意を感じさせた。そのことに亜由子は打ちのめされたのだ。

(馬鹿だったわ、馬鹿だったわ、わたし……)

確か端午の節句の頃だった。姉の佐貴子から電話があつて、何かの話のあとに、

「この間、街で和朗さんを見かけたわよ。いつからあの人ベレー帽をかぶるようになったの」
ベレー帽をかぶっていると聞いて、

「人ちがいよ、お姉さん。あの人ベレー帽なんか大っ嫌いよ」

と、答えたのだった。帰って来た和朗に、

「お姉さんったらね、あなたがベレー帽をかぶっていたって言うのよ。そんな筈あるわけがないわよね」

亜由子はそう告げた。

「へえー、ぼくがベレー帽をねえ」

和朗もそう言つて笑つていた。女のこともさることながら、自分のもつともいやな服装をして